

思春期にある人々を取り巻く 現状と支援

◆ 特集にあたって ◆

未来への架け橋となる思春期看護

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)による自粛生活のなかで、多くの人々が心身の不調をきたしましたが、メンタルヘルスの問題がもっとも大きかったのは、高校生・大学生を中心とした思春期の世代でした。自粛生活を入院生活に置き換えて考えると、思春期の患者を理解するうえできわめて示唆的であると思います。小児期発症の慢性疾患に限らず、あらゆる疾患・障害に対する治療の場は入院から外来へと移行し、複雑かつ高度な問題を抱える10代が、学校・社会のなかで、療養生活を送っています。思春期はとくに孤独感を強める時期であり、疾患や障害があることは増悪因子になり得ます。逆にいえば、信頼できる人や友人と支え・支えられる関係性があれば、入院などの厳しい状況下であっても希望をもって生活できるのです。思春期看護のKeywordは、孤独からの解放、そして未来に希望をもつことではないでしょうか。

思春期は本来、ほかの世代と比較して罹患率・罹病率が少なくとても健康で、入院を要するような患者の大半は10歳未満の小児です。また思春期の患者が抱える疾患の多くは希少疾患であるために、学校・社会生活においては常に少数派となります。それゆえに、臨床知識の蓄積が難しく、また達成感も得られにくいのがこの世代の看護の特徴なのではないかと思います。

第二性徴を迎えた患者のメンタルヘルスや、セクシュアリティの問題、ヤングケアラーの増加やLGBTQ+など、思春期の健康問題は、社会の変化を直接的に映し出す鏡のようです。思春期看護の対象者を深く理解しようと思うと、社会や政治問題との関連性、総合的な思春期保健の知識が基盤となるでしょう。本特集では、思春期の今を多面的・包括的に検討する資料を提供するために、医師・看護師以外の専門職や文化人類学や教育学の専門家にご執筆いただきました。ご多忙のなか、本特集号の趣旨に賛同いただきましたこと、心よりお礼申し上げます。

思春期看護学は、単に小児看護学の最終段階ではなく、さまざまな課題をもった子どもたちを未来へとつなぐ架け橋となる専門領域だと感じています。経済格差が広がり、戦争やパンデミックなど社会不安の大きい時代であるからこそ、病気・障害をもちながらも健やかな思春期を過ごせるような看護が必要だと思います。皆さんの日々の臨床の一助となれば幸いです。

丸 光恵 Maru Mitsue

兵庫県立大学看護学部教授